

巻 頭 言



佐賀県知事 山口 祥義

世界とのつながりを、未来へ

2016年は、佐賀県と世界とのつながりを、より強く感じた年でした。

その一つに、佐賀が誇る有田焼が創業400年を迎えて取り組んだ、さまざまなプロジェクトがあります。

1616年に日本初の国産磁器として誕生し、かつて、遠く海を越えてヨーロッパの王侯貴族を魅了した有田焼。創業400年という節目をきっかけに、世界中の人々からさらに愛されるものとなるよう、有田焼の再評価を促す「リブランディング」を進めてきました。

その柱が、オランダを中心とする8か国16組のデザイナーと伊万里や有田などの産地の窯元・商社16組とのコラボレーションによる、新ブランド『2016/』の開発です。多様化するライフスタイルや世界市場を見据えて生み出された作品の数々は、海外で行われた展示会などでも高く評価されています。海外の人々と組むことによって、新たな風が吹き込まれた有田焼は、次の100年に向けての一步を踏み出しています。

また、スポーツの分野でも、新たな交流が生まれようとしています。それは、2020年の東京オリンピック・パラリンピックへ向けて、オランダ、ニュージーランド、フィジーのホストタウンへ登録されたことによるものです。

既に県内でのキャンプ実施が決定した競技団体もあり、これから、3か国の選手や関係者の方々と県民の皆さんとのさまざまな交流を通じて、確かなパートナーシップを築き、さらなる事前キャンプ誘致の実現を目指していきたくと考えています。

このほかにも、九州佐賀国際空港へのLCC誘致やフィルムコミッションによる海外映画・ドラマのロケ誘致、児童・生徒による学校間交流など、佐賀県は幅広い分野で国際的な結びつきを育んできました。こうしたさまざまな取組から生まれる交流は、新たな可能性を広げていくとともに、人々の心を豊かにし、多文化共生社会の実現につながるレガシーを生み出していくことでしょ。

今年は、1867年に肥前・佐賀藩が日本から初めてフランス・パリ万国博覧会への出展を果たして、ちょうど150年目の記念すべき年でもあります。

鎖国政策をとる日本の中にあって、常に世界を見据えていた佐賀藩。「薩長土肥」の一角として「ものづくり」と「人づくり」の力で日本の礎を築き新たな歴史を切り開いた功績は、今も燦然と輝いています。

進取の精神が根付く佐賀県が、今後もいっそう世界とのつながりを深め、世界の一員として共に発展し、県民の皆さんが「佐賀さいこう！」と堂々と誇ることができるよう、しっかり取り組んでまいりたいと思います。